

## ゲーテとシラーの作品に現われたスイス

近 藤 等

十八世紀は、一般的に定義されているように『自然の世紀』であった。ジャン・ジャック・ルソーの影響を受けて世俗的な都市生活にあきあきた人たちのうちから、野外生活を欲求する声が湧き起り、その声は山国スイスに向けられた。文学、旅行、自然科学、すべては山の魅力の影響を蒙った。今日の表現を使うならば『山のよび声』に惹きよせられたのである。

ドイツにおいては、まずゲーテとシラーが、山を詩と戯曲にとりあげている。

ゲーテは、三度、ハルツを訪れ、その最高峰ブロッケン山の頂きに足跡をしるしている。『冬のハルツの旅』の最後の詩句は、この山は捧げられたのである。

測り知れざる胸持てるおんみは

警異せる世界の上に

神秘に充てる姿して聳え

世界の富と壮麗とを

雲の中より見はるかすなり  
 その富とその壮麗とをおん身は  
 おんみと並び立つ兄弟なる山々の  
 血管によりて水飼う

(ゲーテの詩は片山敏彦氏訳による)

またゲーテは、アルプス旅行を回想して、『ファウスト』の中で、その印象を詩に移している。『ファウスト』の第一部『夜』の巻頭の情景がこれである。

ああ、おんみ月の懐しい光に照らされている  
 山の頂きへ登って行って  
 霊たちと共に峰のまわりを漂い  
 牧場に照るお前の薄明りの山を行きめぐり  
 あらゆる知識の濃烟からこの身を脱して  
 おんみの露のしずくを浴びて蘇生したい！

また第二部の序幕は、花のしとねに目覚めたファウストが、黎明の山を仰いだものである。

仰ぎ見よ！——巨大な山嶺は早や

極みなく壮嚴な時の来るを告げている。

あの頂きは永遠の日の光を早くも楽しんでいる。

もっと後に我々の所まで降る。

今、アルプの緑の牧場に

新しき光彩と明るさが与えられる。

そして一段一段と下へ行き渡る——

太陽が昇った！

ゲーテルによって、風景は純粹に享受され、完全な調和が人と自然の間に生れたのであるが、こうした自然感情を  
はぐくむのに影響した彼のアルプスへの旅について述べると、ゲーテは、一七七五年、一七七九年から一七八〇年に  
かけ、また一七九七年と、三回にわたってスイスを旅行している。

はじめてのスイス訪問は、一七七五年の六月から七月にかけてであつて、『ウェルテル』の成功後、間もない時で  
あつた。ちやうどイギリスのバイロンが『チャイルド・ハロルド』の最初の二章を書き上げた時のように、この時の  
ゲーテも、すでに相当の名声をもっていた。彼は、はじめシュトルベルク二兄弟と行を共にしたが、この二人の青年  
は軽卒で、うるさく、彼にはめいわくだつたので、間もなく別れ、その代りに、ストラスブル大学時代の学友、パ  
サヴァン神父と同行することになった。この神父とは、チューリッヒで偶然落ち合ったのである。この旅行の印象は  
『詩と真実』(Dichtung und Wahrheit 第17, 18章)の中に記されているが、ゲーテの思想と作品の歴史を研究する

者にとって貴重なものである。

フランクフルトから出発した陽気な旅行者たちは、シャフハウゼンをへて、スイスに入り、チューリッヒに到着した。ゲーテは、ここでラヴァターと再会した。彼らは前年、ドイツで近づきになったのであるが、ゲーテは口をきわめてラヴァターを賞賛していた。ラヴァターは親愛の情をもってゲーテを迎え、チューリッヒのすぐれた人物に紹介した。この中には老詩人ボドマーがいた。彼は批評家でもあり、当時の若い文人たち、ラヴァター、ゲスナー、ベスタロッチらは、いつも彼の周囲に集まっていた。

チューリッヒ滞在をおえたゲーテは、パサヴァンとともに、あるうららかな日に、湖上を舟遊した。この時の思い出を、彼は朝風のようにさわやかな詩句にとどめている。

……限らない空間の中に、私は活気ある食物、新しい血をくみとる。私を腕の中に抱きしめてくれる自然は、何と愛情深いものだろう！ その調子に合わせて、彼は私たちの小舟をしずかにゆすっている。壮嚴な、雪の山は、私たちのコースの前に現われて来る。

あゝ、私の目よ、なぜ下をむくのだ？ 波の上には、無数の星がかがやいている。ほのかな霧が、遠い山々をつつんでいる。朝風は岸の上を吹き、湖上には黄色い収穫物が影をうつしている。

ゲーテは、リヒタースヴィールでは、ホツツエ医師のもとに泊り、そこからアインジードルンへ行つて、古い修道院を訪ねた。次にシュヴィッツに下つて、リギー山に登り、日の出を見るために山中に泊った。しかし、霧がかつたので、日の出の光景は見られなかった。そこから彼は四州湖に出た。

「七月十九日、午前六時、潮水に沿つてヴィツナウに向う。そこから船でゲルザウへ行く。正午、湖畔の旅館に泊る。二時頃四人のテルが誓約を交したグルトリー山の前に到着。次に英雄が身を投じた展望台に着く。彼の生涯の物語は絵画によつて久遠に伝えられている。彼が舟出したフリーレンには、三時頃着く。

潮水の波に洗われて、迷路のごとく入りこんでいる岩の間にあつて、人が詩的伝説を好むのは、もつともなことだ。不動の岩は、無言でわれわれの前に立っている」

二人の旅行者は、フリーレンで船をすてアムステークとロイスの谷を経て、サン・ゴタールへと向つた。彼らは峠の頂上についた。ここからイタリアへは、ひとまたぎである。パサヴァンはイタリア行きを提案したが、ゲートはこのような旅行の準備ができていなかった。それに、スイス旅行中、彼の心を占領していた女性リリーに対する愛情が、彼を故国へとつながっていた。彼はイタリア行きをことわり、二人は、もと来た道を引きかえした。

「私の友人はイタリアへ行きそこなつたことが残念でならなかった。彼は前以てこの旅行を計画し、私を驚かそうとしたらしい。したがって、帰りは、行きほど愉快ではなかった。私はしずかな山道をたどりながら物思いにふけた」

二人はチューリッヒに戻つて、ふたたびラヴァター、ボドマー、および新しい友人たちに会つた。しかし、シュトルベルク兄弟には会わなかった。兄弟は、町の城門の近くで、すっぱだかで潮水で水あびをした。それはゲートの言葉を借りれば、「泡立つ波に、はだかの胸」をさらすためであつたが、この傍若無人のふるまいは、沿岸の住民たちをいからせてしまった。彼らは二人をめがけて石をなげはじめたので、二人は、ほうほうのていで水から上がり、着物を着て逃げ去つた。

ゲートは問もなく、故国への道を辿つた。

「私はフランクフルトへもどったが、みんなからよろこび迎えられた。この中には、私の父もふくまれていた。しかし、彼は、私がアイローロに立寄ることなく、したがって、ミラノから私の帰りを告げることがなかったことを遺憾に思っていることをそれとなく私に知らせた。彼は、ごつごつした岩や、霧のかかった湖や、竜の巢などには、少しも興味をもたなかった。表立っては反対はしなかったが、これらはあまり感心しないということを示した。彼にあっては、ナポリを見ない者は何も見ていないのと同然というのであった」

ゲーテ参議員は、昔、イタリアを旅行したことがあった。そして彼の旅行談は、幼い息子に強い印象を与えた。それより数年後、すなわち一七八六年は、詩人ゲーテはイタリアを旅行して父を満足させた。

彼は一七七九年九月十二日から一七八〇年一月十三日にかけて、ふたたびスイスをおとずれた。今度、彼と同行したのは、彼の主人で友人であるヴァイマルのカルル・アウグスト公（公にとっては、お忍びの旅行であった）と森林監理官のウェーデルであった。

一行はバーゼルからスイスに入り、ビルス川の谷、ジュラ山脈の中腹を通り、ドール山に登った。この山の頂上から、彼らはフランス系スイスの一部を眺めることができた。

「霧は徐々に晴れてきた。めいめいが何物かを発見した。少なくとも、発見したと信じた。やがて、ローザンヌの市街が明瞭に現われ、周辺の別荘がはっきりと見られた。次にヴグヴェーとシオンの城。ヴァレー州の入口を湖水のところまで私たちが隠していた山々が見えた。サヴォア州の沿岸においては、エヴィアン、リパーユ、トノンの各都市と、その中間の村落や家々が次々に現われた。

この間にも、輝く氷河の流れは、私たちの目と魂を引きつけてやまなかった。日は徐々に西にかたむき、高い台地は一段と強く照らされていた。なんと多くの黒い岩、歯、塔、壁が、奇怪な、巨大な、奥底の知れぬ柱廊となって、

雪のふところから出ていたことだろう！ これらの様々な形をもった物体が、はっきりとした姿をとって、空間にそびえたつを見る時、人は無限という觀念を容易にすてたくなるのだ。なぜなら、有限それ自身が、人の目と思考を疲らせるのに十分だからだ。

私たちの前には、人の住む、肥沃な土地がひらけている。私たちのふんでいる土地には、樹木はないが、草がはえていて、家畜のえさとなっている。その家畜を、人間は自分の用に役立てている。しかし、この万物の靈長も、高いアルプスは手がとどかない。アルプスの山々は、いわば聖なる処女の軍隊であり、私たちの到達し得ない所で、永遠の純潔さの中に、天帝が自分一人のためにそなえておくものである。

私たちは日没頃、サン・セルグ要塞の廢墟に達した。さらに谷に近く進んだ時、私の目は氷河にすいよせられた。左側のどんずまりのオンバーランドの氷河は、炎の霧の中に消えて行くように見えた。手前にあるものは、まだ、そこかしこ鮮かな色彩をおびて見えた。それらは次第に白、みどり、灰色に変わり、ほとんど陰気な感じを与えた。

死が人間をおそう時、手足から心臓へと征服の歩みを進めるように、すべての峰は、モン・ブランの方向に向かつて、しだいに色を失って行った。モン・ブランの広い胸は、まだ朱色に輝き、まだその輝きをつづけようと欲するかのようであった。それは、ちようど、愛する人の心臓の鼓動がとまって、完全に死んだことを確認したくないと思う者のようであった。私たちもまた、名残りおしげにその場を去った。」

時はちようど、ド・ソーシュールやブーリの著書がシャモニとサヴォアの氷河を賛美していた頃であった。一行も、そのような旅を創愛できるはずはなかった。彼らはジュネーヴでド・ソーシュールおよび町の名士に会ったのち、シャモニに向かった。

この旅行の間『ヴェルテル』の幸福な作者は、シュタイン男爵夫人にあて、しばしば手紙を送った。ゲーテはこれ

らの手紙の中で、正確、軽妙な筆致で、かずかずの出来事を報じている。そして、彼は自然の魅惑によって得た幻想を、遠方の女友たちにはつきり味わせようと、とくに意を用いている。ジュネーヴからシャモニへ、つづいてマルティニーにおいて、彼は壮麗な山々の美しさを読む人の心に示めそうと欲した。この美しさは、峰々の果てなく高い頂に存し、これらがいかめしく天空にそそり立っているので、モン・ブランの夜の明るさが蒼穹に属するように見えることを、彼は一挙に悟ったのだった。「無限」の中にとけこむ感情、すなわち峰々と、天空と、動いて止まぬ雲の中にとけこむ感じを与えるにふさわしいモチーフを、彼は熱心につかみ、手紙ごとにこれらの変化してやまないテーマを詳しく語っている。彼は古典的な「珍らしいもの」、低地と高地との間の、云い古されたコントラスト、さらには風景の新奇さ（山々の広大な不動性の周囲に、思いがけない運動を展開する水蒸気や霧に対して、彼が向けた深い注意にくらべると、これらはわずかしかな彼の注意を惹かなかった）よりも、これらのテーマを好んだ。すでにサランシュにおいて、彼は霧のふしぎな発生に興味を向けている。

「私たちが正午の休息をとっている間に、空は小さい、白い、羊のようなものでおおわれました。……晴れた日に、私たちは同じように美しい、またもっと美しい霧がベルンの氷河から上昇するのを見ましたが、ここでも私たちは同じものを見たのです。あたかも太陽が最も高い氷河の、最も軽い蒸気を自分の方へ引きよせたように、そして、この至純な蒸気が、泡立つ羊毛と同じく、大気の中で梳かれ一つるように見えました」

シュッドからさき、隘路に入った彼は、登山路について、驚くほど簡潔な、また忠実な描写をしている。筆致は簡素で、大まかであるが、非常に正確なものである。ゲートルは、地名の一つ一つを記していないが、C・E・ニンゲルは、ゲートルの文章には正確な地名を当てはめることができるとして、次のような考証をつけている。

「私たちの前には、早くも雪の山々が現われました。（註、ホルムナースと、エギーニット・デュ・プレヴァン）谷はせま



くなり、アルヴ川が岩（註、エグラーズ）の割れ目からほとばしり出ています。私たちは一つの山（註、ジューの丘）に登りはじめました。氷河は私たちの右側前方にあり、ますます高く見えました（註、ジューの上手に現われるドーム・デュ・グテ）様々な山、昔ながらのもみの森林が右手に現われました（註、テート・ノアール・ド・モンフォール）森のあるものは深いところに、他のものは私たちと同じ高さの所にありました。私たちの頭上の左側にあっては、山頂がはげで、ぎざぎざになっていました（註、フィスの岩）私たちはますます力強くなる山塊に近づきつつあることを感じました……セルヴォーズのさきで、一つの丘（註、モンテ）に登りました。山塊は、いよいよ大きくなります。自然は目立たない手をふるって、ここに巨大なものを準備しはじめたのです」（註はC・E・エンゲルの考証によるもの）

シャモニで、ゲーテは空の観察をつげた。

「私が、いまこれを記している時、天空にすばらしい現象が起っています。霧はうごき、ところどころ切れて、換気窓からのぞくように、青空と山頂とを見せてくれます。これらの山頂は、霧の幕のかなたに、朝の太陽によって照らされています。このような光景は、私たちにうらかな天候を約束してくれるとともに、限りなく目をよるこぼせしてくれるものです。最後に、私たちは山々の高さを判断するため、いくぶん比較の標準となるものを持つのです……」

モンタンヴェルへのおきまりの旅行のうち、二人の旅行者は、マルティニーの方へ進んだ。アルジャンティエールの上手、ボヴレノーの橋で、彼らはヴァロルシーヌの道をえらぶべきか、パルムの峠をえらぶべきかと迷った。空はくもっていたが、彼らは高い道をえらんだ。こちらへ行けば、うまく雪切れがした時に、有名なパノラマ風の景色が見られると思つたからである。

「私たちがトゥールの氷河に達した時、雲が切れ、まだ光りがやく美しいこの氷河を見ることができました。次

に、私たちはアルヴ川の水源に向かい、荒涼とした草原を歩きました。私たちは一層雲の地帯に近ずき、ついに、まったく雲に包まれてしまいました。私たちは忍耐強く長時間の登りをつづけましたが、突然、頭上の空が晴れてきました。少したって、私たちは雲の中から出て、足下の谷間にその雲が立ちこめているのを見ました……私たちは、ついにバルム峠にたどりつきました。そこは不思議な光景お呈していました。山々の稜線の上の高い空は雲っていました。足下には、時々ちぎれる霧を通して、シャモニの谷全部が見えました。これら二つの雲の間に、山々の頂上をすべて見る事ができました」

しかし、ゲーテは空中の現象にだけ気を取られていたのではなかった。あわただしい旅行のうちに、彼は地形について、実に正確な印象をとらえている。これらの地形については、当時の自然科学者たちが、どう定義すべきかと苦心していたのである。シャモニの谷は底がせまく平なので、ゲーテはパンのこね鉢のようだと言ったが、地理学者たちは、それから百年たったのち、これを「かいばおけ」にたとえた。モン・ブランに面するドールの山頂において、彼は山の特徴をとらえようとして、次の言葉を使ったが、これはその後、一般的に云われるようになった。

「雪のふところから、無数の黒い岩、塔、壁がそびえて、荒涼たる、巨大な、入りこむことのできない柱廊を形づくっています……」

ゲーテの手紙は、当時は公表されなかったもので、当時の社会にいちじるしい影響を与えていないが、彼の自然崇拜がいかに深かったかを示している。

サヴォアから、二人はバルム峠、マルティニーをへて、ヴァリス州に入った。ヴァリス地方は、今日、天下に知られているが、当時はほとんど知られていなかった。ゲーテは、これについて、次のように記している。

「私たちは、末明に、馬でマルティニーから出発し、間もなくシオンに着きました。めずらしく晴れた、よい日で

した。美しい谷間の風光は、愉快な思考をよび起しました。ヴァリス州全部のひろがり、山から山へと、眼前にひらけ、一望の下に見られました。

ローヌ河は様々のカーヴと、かん木のしげみをもって、村落、牧場、耕作された丘の前面を流れていました。遠方には、シオン城と、そのうしろにそびえるいくつかの丘が望まれました。一番遠い所は、一連の山々によって、円形劇場のようにとざされていました。これらの山は、風景の他の部分と同じく、正午の太陽に照らされて、白くかがやいています。私たちの通る道は、石が多くて不愉快でしたが、それだけに沿道のぶどう棚は見る目にころよいものがありました。一片の土地をも貴しとする住民は、道路と自分たちの土地をへだてる塀に、ぶどうのかぶをうえているのです。ぶどうは常に太くなり、くいや棒に支られて、塀の上に出ており、全体が長くつづいたたった一つのぶどう棚のように見えます。

谷の下の方は、おもに草でおおわれていましたが、シオンに近づくにつれて、ここにも、いくらかの作物が見られました。この町の近くには、一連の丘があつて、不思議な変化を風景に与えています。この風景を賞するために、長くこの地にとどまりたいと誰しも思うでしょう。しかし、町と住民のみにくさは、美しい景色をすっかりぶちこわしています。甲状腺患者のおそろしい婆は、私を極度におどろかせました。シオンでは、旅館がひどいもので、町はみにくくて暗いところです」

この手紙は、リリーに代つてゲーテの心をしめるようになったシュタイン夫人に当てたもので、十一月八日、シオンから出されたものである。

こういう次第で、一行はルエーシュに至ることを目的としてのみこの町にとどまり、ルエーシュからジェンミ山に遠足した。それからローヌの谷に戻り、ブリীগに至り、ローヌの永河まで進んだ。この旅行で、ゲーテは相当な登

山家ぶりを示している。

「私たちは左手にひろがる永河にそって進み、間もなく、谷川にかかった小さな橋を見つけました。この急流は、ローヌの本流から別れて、地味よくない、小さい谷に沿って流れています。しかし、永河から眺めると、右も左も、前も、一本の木さえなく、すべてが荒涼としています。切り立った、のしかかるような形の岩はなく、ただ長い谷と、ゆるい傾斜の山々があるだけです。雪におおわれたこれらの山は、一樣につづく平野を私たちに示していました。」

三時間半歩いて、私たちはフルカ山の背に達しました。ウリー州とヴァリス州との境を示す十字架がそこに立っています。

この場所では、まだ二重になった頂上は見えませんでした。（頂上がふたまたになっているので、フルカ、すなわち「肉さし」という山の名が生じたのです）私たちは、下りはもっと楽だと期待していましたが、案内人たちは、雪がもっと深くなるだろうと告げました。間もなく、彼の云った通りになりました。私たちは、ずっと一列になって進み、先頭に立っていた者は、しばしば腰の上まで雪にうずまりました。案内人たちは、こういう雪を物ともせず、巧みに道を開いて行くので、私たちも勇気づけられました。私自身について云えば、この歩行はそうひどくは私を疲れさせませんでした。

ついに、十字架の所から三時間歩いたのち、リアルプのまばらな人家を見ました」

そこには、カプチン会修道士の経営する宿坊があり、一行はウルゼレンの谷あいの道に進む前、ここに足をとどめた。サン・ゴタールは、一行の旅の目的地であった。ゲーテは、一七七五年、バサヴァンとこの地を訪れたことがあるので、ふたたび行って見たいと思っていたのだが、この思いは、ついにとげられたのである。

「この地方が雪におおわれている時を見たいと考えていた私の願望は、ついに達せられました。道はロイス川に沿って走り、川は岩から岩へと下って、様々の美しい滝を見せています。とくに、その中の一つは、幅も深さも十分にあり、黒い岩を越えて流れおちています。その美しさは、私たちを長時間ひきとめました。ところどころ、クレバスと、平たい場所に氷の塀が横たわっており、水は黒白の斑点のある大理石の下も流れているように見えました。氷は水晶の目のように、また火箭のようにかがやき、清らかな水は、ほとぼしり流れて行くのです。」

実際は、サン・ゴタールはスイス第一の高山ではありません。サヴォアにあるモン・ブランはこれよりずっと高いのですから。しかし、サン・ゴタールには、もろもろの大山塊が集合しているので、依然として山の王者の貫録は十分にあります」

一行はロイスの谷と四州湖をへて、ふたたび平地へと下った。一行がチューリッヒをすぎる時、ゲーテは、彼が賛してやまないラヴァターに再会した。

「ラヴァターと親しむことは、公にとっても私にとっても、全旅行の頂点をなすものです。彼に会うことは、天の近くまで昇ることであり、人は長い間、そのよい影響を感じることでしょう。この人物の優秀さは言葉で表わすことができません。私が知っている限りのすべての人間のうちで、最も善良な、最も偉大な、最も賢明な、最も愛情の深い人です」

ラヴァターもまた、ゲーテのこの敬愛に答えた。彼もまたゲーテについてこう云っている。

「彼は私に沢山の草稿を読んできた。彼の朗読の巧みさ！ その作品のすばらしさ！ 真実を描いた場面、人間性の忠実な描写、たくまざる自然さ！」

チューリッヒから、一行はシャフハウゼンに行き、そこで、十二月六日、うららかな一日をラインの滝見物にすご

した。一行は、そこからドイツにもどった。

ゲーテは一七九七年に三度目のスイス入りをしたが、この最後の旅行は、思いがけない文学上の結果を生んだのであった。

チューリッヒにおける彼の友人の一人、ハインリッヒ・マイヤーが、湖畔のシュテューファーで病氣になった。(マイヤーはすぐれた美術批評家であり、しゅう集家でもあった)そこで、ゲーテは数日を彼のもとで過ごそうと決心した。彼はシュテューファーに行ったが、そこには長いこととどまらなかった。アルプスに対する彼の情熱はふたたびわき立ち、マイヤーとともに、二つのミテン山、四州湖、サン・ゴタールを見て、やっと落ちついた。この旅行のコースは、第一回の旅行のそれと、ほとんど同じだった。二回の旅行における彼自身の印象をくらべるため、とくに同じコースを選んだらしい、彼はこう云っている。

「二十年前にこの地方から受けた印象を私は思い出した。最初の印象は大体において残っていたが、細部の印象は消えてしまっていた。私はこの経験をくりかえし、正したいという不思議な願望を感じた。人間が変わったので、事物も変って見えたに違いない」

この「経験」を判断するために、私たちが持っているものは、いくつかの手紙と、旅日記だけであるが、この日記は、旅の印象を記すよりも、もっと多く、歴史、風俗、統計、その他百般の事項についての簡単な覚書を書きこんだものである。これから結論し得ることは、この経験が当て外れではなかったということである。私たちにとってとくに興味深いことは、ゲーテの頭に叙情詩の構想が生じたことで、その主人公はウィルヘルム・テルとなるはずであった。

この考えは、四州湖畔の散歩から生れた。

「シュヴィッツからアルトルフへ。私たちはシュヴィッツで泊った。朝になると、美しい景色が眼前に展開した。前方にはみどりしたたる草原——その所々に、白い家と大きな果樹。後には黒い、けわしい岩——その岩にそって、雲が低く動いて行く。ミテンや他の山々もはつきり見える。ところどころ青空がのぞいている。いくつかの雲は、日にかがやいている。四州湖の一部が見え、その向うには、雲をいたたく峰々が見られた」(九月三十日)

この描写は美しい。ゲーテは考えにふけた。彼は偶然、チューディーの一冊を手にし、これをシュテューファに持参し、夜、眠る前に読んだ。翌日は雨ふりだったので、一日、マイヤーと話をすてごした。「スイス年代記中に、テルの物語を読む。この題材をいかに扱うべきかについてマイヤーと語る」(十月九日)

そして、この数日後、ゲーテはシラーにこう書き送った。

「この散文中から、詩を作る計画が生れたが、それは私に大きな自信を与えるものです。私はテルの伝説は叙情詩にすることができるとは確信しています。私は短期日に、できるだけ努力をして、事件の舞台(これは広くはないが興味深いものです)や住民の性格、風俗などを、正確に頭に入れました。この計画から一つの作品が生れるためには、ただ一つの好運がさざけられさえすればよいのです」(一七九七年十月十四日)

ゲーテが大きな自信をもったのは、故あることだったろうか? もちろん、彼は叙事詩を書くだけの力はある。しかし、彼のいわゆる『テルの伝説』は、彼が思うほど容易に叙事詩とすることができるとは種類のものであったろうか? いや、この物語とそのエピソードのすべては、本質的に劇的なもの、芝居に仕組むべきものではあるまいか? 推測はやめよう。事実として、ゲーテはヴァイマイルへ帰ると、いろいろの仕事に設頭して、思うように詩作にふけることができなかった。

このことはシラーに幸した。ゲーテの同意を得て、シラーはこの題材を自分で手がけることになった。しかし、劇

作の経験のある彼は、叙事詩にこだわることなく、この題材の中に何を見出すべきかを知っていた。すなわち、それはドラマであった。彼はゲーテの助けを得て、熱心に仕事をした。そして一八〇四年の二月に、ゲーテに次のように書き送ることができた。

「私の作品をお送りします。現在、私はこれ以上何を加えるべきかを知りません」

これに対して、ゲーテはこう答えた。

「作品は完全な成功です。おかげで、ひと晩をたのしくすごすことができました。」

劇は習三月の十七日ヴァイマル劇場で上演され、観衆はゲーテと同じ言葉をくりかえすことができた。すなわち、彼らはひと晩をたのしくすごしたのである。シラーはこの成功を見たのち、その短い生涯を終ったのである。

この作品において注目すべきものは、単に文章の華麗なこと、観察の深さ、性格の直実性だけではなく、作中人物が動きまわる山の背景である。作者がアルプスを見ないで、どうしてこのように正確にこれを描くことができたのか不思議に思われる。

シラーは、スイスやアルプスを見なかっただけではなく、ドイツ国内においてさえ、ほとんど旅行していない。

シラーはヴェルテンベルク州、ネツカー河畔のマールバッハで生れた。彼は都会としてはシュトゥットガルトとマンハイムしか知らなかった。彼はシュトゥットガルトで勉強し、軍医になるつもりで学位をとったが、次にマンハイムに移り、ここで医学よりも文学に志すに至ったのである。彼が最初の劇『群盗』（一七八二年）を発表したのは、この町においてであった。

この処女作がグリゾン州の住民のうらみを買った話は有声である。なぜなら、登場人物の一人がさぎの経験のない仲間にかう云っているからである。



「お前はぬすみを知らんのか？ そんなら、グリゾン人のところへ勉強に行くがいい。あすこは、すり修業の中心地だそうだ」

ドイツ文壇にとって——そしてまたスイスにとつても——幸なことには、シラーは、このためヴェルテンブルクを去つて、イエナに至り、ここで数年、歴史の教師をした。ついでヴァイマルに至り、ここでゲーテと知り合い、親交をむすんだ。ドイツ国内数ヶ所に居をうつしたというのが、シラーの旅行のすべてである。山に關しては、彼は『黒い森』<sup>シュワルツェン</sup>さえ知らなかった。アルプスというと、彼はそれを夢想しただけである。彼はアルプスを書物の中で読んだが、とくにゲーテの紀行文でこれを知つたのである。

彼は知識を求めて、すべての著書を参照したにちがいない。彼が古い年代記編者、デュディーを読んだことは知られている。山岳地方の住民については、ショイツァーやエーベルの著書をしらべ、ハーラーの詩を深く味わい、おどろくべき博学の歴史家のヨハン・フォン・ミュラーと長時間話し合つた。しかし、この劇の残りの要素は、どこから来たのか？ この残りの要素こそ、作品のほとんどすべてである。それは描寫の才能であり、過去をよみがえらせる力であり、登場人物に生命を与えて、彼らを語らせる力である。この要素を彼はどこから得たのか？ それは大詩人たる彼の素質の中に見出したのである。このことは、それよりずっと後（一八二七年）ゲーテがエッケルマンに語つた言葉によつて示されている。

「シラーは自然をとらえる目をもつてはいなかつた。彼の作品『テル』の中にある地方的なもの、スイス的なものそれは私が彼に語つたのである。しかし、彼はおどろくべき才能を有し、人から聞いた話によつてさえ生々しい現実の世界を描くことができるのだ」

シラーはこの言葉通りのことをなしとげた。シラーがおかした地理学上のあやまちを発見しようと努めたユーージェ

レス・ランペールは、ただ二つしかこれを見つけなかった。しかも、それはきわめてささいなものであった。このことは、シラーが劇中の人物を活躍させる背景を、いかによく準備したかを示すものである。(つづく)